



## 親であること～見返りを求めず、出会えたことに感謝して～

「大村 はま」先生をご存知でしょうか。

昭和3(1928)年から74歳で退官するまで52年間、子どもたちに国語を教え続けた先生です。平成17(2005)年に98歳で亡くなられるまで「教師としての在り方」を説き続けました。

著書「教えるということ」(ちくま学芸文庫)の中に「教師の仕事」と題して、昭和48(1973)年2月に天童市で講演されたときのお話が記載されております。



悠美館のユキノキの花

※写真と本文は関係ありません

### 「教師の仕事の成果」

○「仏様がある時、道ばたに立っていらっしゃると、一人の男が荷物をいっぱい積んだ車を引いて通りかかった。そこはたいへんなぬかるみであった。車は、そのぬかるみにはまってしまっ、男は懸命に引くけれども、車は動こうともしない。男は汗びっしょりになって苦しんでいる。いつまでたっても、どうしても車は抜けない。その時、仏様は、しばらく男の様子を見ていらしたが、ちょっと指でその車におふれになった。その瞬間、車はすっとぬかるみから抜けて、からからと男は引いて行ってしまった。」(中略)

「こういうのがほんとうの一級の教師なんだ。男は、み仏の指の力にあずかったことを永遠に知らない。自分が努力して、ついに引き得たという自信と喜びとで、その車を引いていったのだ」

○幸田文さんの書かれた随筆に、(中略)大変好きなことばがありました。お嬢さんを御結婚で、送り出される時のことです。お嬢さんが長い間、お母さんだけに育てていただいたことを心から感謝なさいました。そのとき、幸田さんは「(中略)それは何かしてあげたかもしれないけれど、それが私の生きがいであった。あなたを世話し、あなたを愛し、あなたのために心配し、いろいろなことをしてあげることが私の生活そのものであったし、生きがいであった。それでじゅうぶんむくいられたのであって、私に恩義のようなものを感じることはない」とおっしゃったというのです。(中略)生徒があつて教えることができ、それが私の生きがいでした。それでじゅうぶんむくいられたと思います。子どもから何もお礼を言ってもらえなくても、私はその生徒を教えることによって、自分の生活というものがあつたのです。私という人間のこの世にいたしるしにもなり、この世に生きた意味があつたのです。自分の努力は全部むくいられた思いがいたします。

教師の視点から述べられておりますが、「親も同じであるなあ」と感じました。私たちは、子供に見返りを期待して親としての務めを果たしているのではありません。親であるがゆえに、親としての務めを純粹に果たしている。そして、多くの苦労はあるにせよ、親としての行為そのものを通して、自分の人生が豊かになり子供と共に成長していく…。「この子がいるから…」という感謝の気持ちをもって、子供と共に泣き、笑い、生活していきたいものです。



我が家のユキノシタ

※写真と本文は関係ありません

【担当】尾花沢市教育委員会こども教育課  
教育指導室長 工藤 雅史  
TEL 23-3330